

石川県白山自然保護センター普及誌

# はくさん

第19巻 第3号



## ハクサンシャクナゲ (*Rhododendron brachycarpum* G. Don)

ハクサンシャクナゲ(白山石楠花)は、本州中部から北海道にかけて分布している常緑の低木です。県内では、白山を中心にして、南は三ノ峰、北は大門山までの県境の高山帯、亜高山帯の尾根や斜面に自生しています。初夏になると美しい淡紅色ないし白色の花をつけて登山道を彩り、人々の心を魅了します。

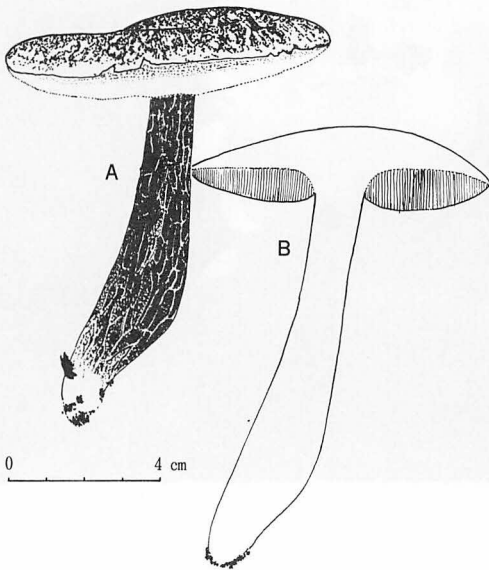
山地帯上部では、ホンシャクナゲと分布域の重なるところがあります。花弁はホンシャクナゲが7つに裂けるのに対して5つに裂け、葉は、ホンシャクナゲより薄くて先は尖らず、柄に接する部分もホンシャクナゲより円みを帯びています。

# 白山のブナ林のきのこ



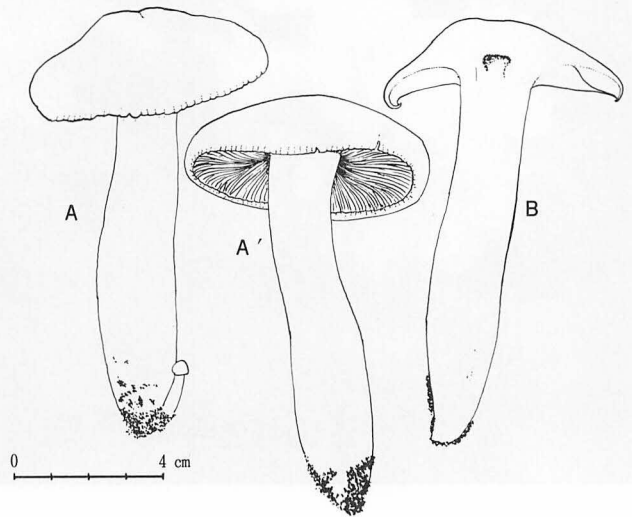
池田良幸

アオゾメツチカブリ (ベニタケ科)



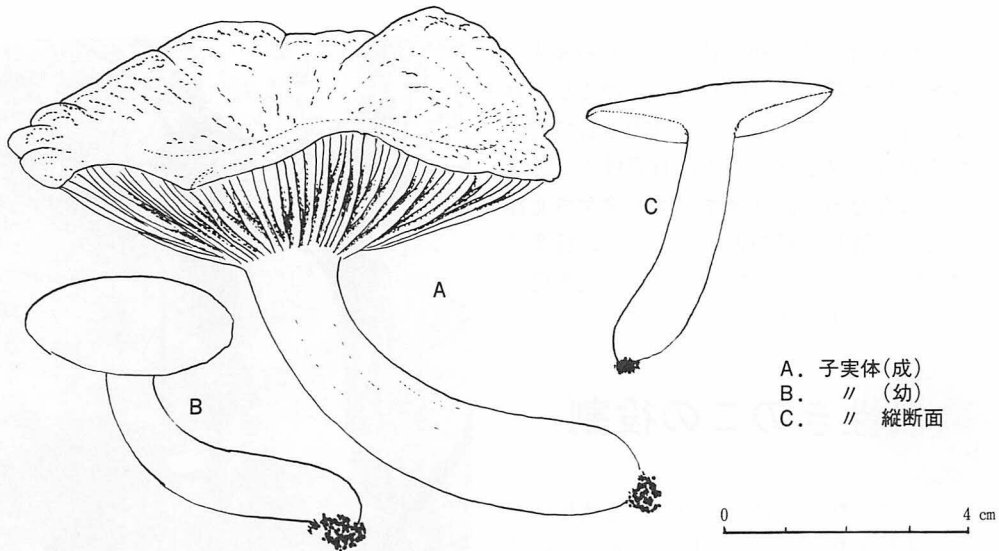
A. 子実体  
B. 子実縦断面

ムラサキヤマドリタケ (イグチ科)  
*Boletus violaceofuscus* Chiu  
(夏-秋 ブナ科樹林下に散生 分布：日本(本州、四国、九州)、中国、韓国)



A. 子実体  
A'. 子実体裏面  
B. 子実体縦断面

アケボノサクラシメジ (ヌメリガサ科)  
*Hygrophorus fagi* Becker & Bon  
(秋 ブナ林下に群生 分布：日本、ヨーロッパ)



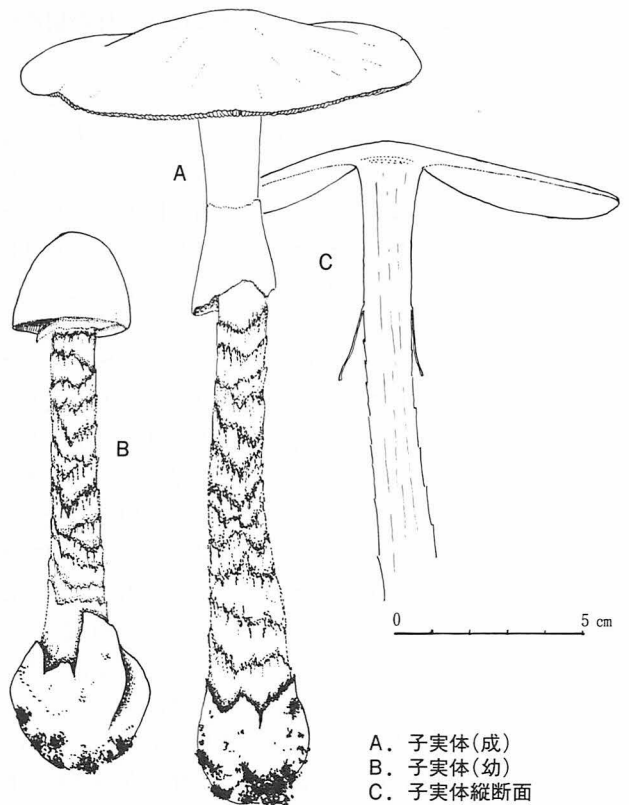
A. 子実体(成)  
B. // (幼)  
C. // 縦断面

うっそうと繁った夏のブナ林の中は日中でも暗いが、秋も深まり紅葉が近づくと林内は急に明るくなります。その頃になると、ブナ林内を、かさこそと落葉を踏み、低木を掻き分けてお目当てのきのこを探す人が多くなります。

きのこは、腐生きのこ類（木材腐朽菌及び落葉腐朽菌）と菌根性きのこ類（菌根菌類）に分けられますが、ブナ林で採集されるきのこは、広葉樹の立ち木や倒木、落枝葉を分解する腐生きのこ類で、中でもマイタケ、ナメコ、ブナハリタケ（かのした）、ムキタケ（のどやき）、ナラタケ（もちあせ）の他、落枝葉などに生えるチャナメツムタケ、キナメツムタケ、シロナメツムタケなどがあげられます（表参照 P5）。

ピロードチチタケ (ベニタケ科)  
*Lactarius luteolus* Pk.

(夏-秋 ブナ科樹林下に散生 分布：日本（北海道、本州（石川県白山））



A. 子実体(成)  
B. 子実体(幼)  
C. 子実体縦断面

## 白山の腐生きのこ類と 菌根性きのこ類

ブナ林では菌根性きのこ類のきのこ狩りは行われていないようですが、たくさんの菌根性きのこが発生し、食用可能な種類もかなり多い事が筆者の調査で分かってきました。これまで調査したところ菌根性種84種のうち食用可能種31種、有毒種は猛毒種1種を含めて9種確認しました。

一方、腐生種は腐朽した樹木に発生するヒダナシタケ類など極めてその種類は多いのですが、その中で材上性きのこに限って数えると42種で、このうち食用可能種は20種、有毒種は猛

ドクツルタケ (有毒種) (テングタケ科)  
*Amanita virosa*(Fr.)Bertillon

(夏-秋 ブナ科樹林下、時に針葉樹林下に発生 分布：北半球)

毒種1種を含めて4種が認められています。

従来、白山麓の人々は材上性きのこしか食べなかったようですが、その理由として考えられるのは、材上性きのこは有毒種のツキヨタケ（ぶなたろう）とオオワライタケさえ注意すれば、残りは見誤ることはなく、採集するにも険しい山中で集中的にでき、能率的で収量も多く美味な物も多いためでしょう。

## 菌根性きのこの役割

さて、ブナ林で注目されなかった菌根性きのこ（菌根菌類）は、どの様に生育しているのでしょうか。

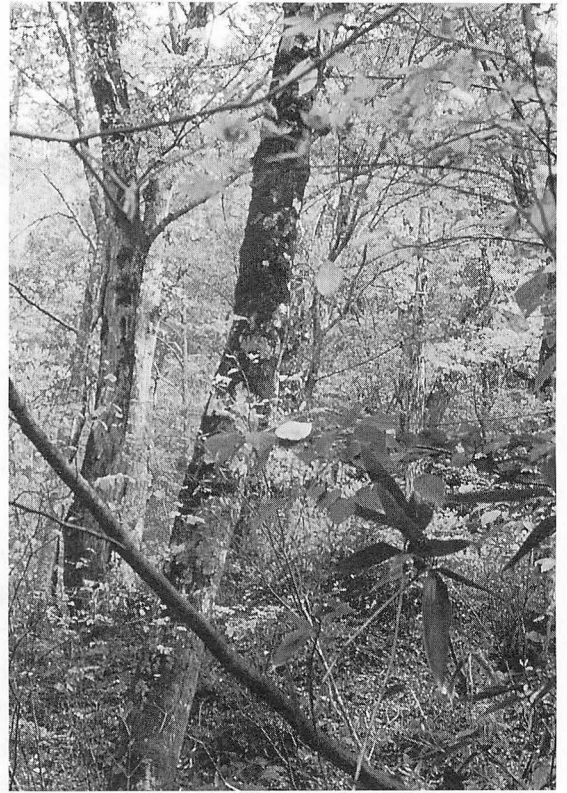
あの険しい山にブナを初め多種多様の樹々が生育するには、菌根性きのこの共生なしでは不可能に近いのです。つまり、白山のブナ林の表土は極く薄く、その下は大小様々な母岩破片が重なり、そこにブナ林の樹々が根を張り、岩石片にからみ、まといつき、わずかな水と肥料を吸収して生育しています。これを助けるのが菌根性きのこで、菌糸がより細かい間隔から水と肥料を集めてブナを初めとする菌根性きのこの宿主樹木に送り、それらの樹木の根の先端を守り、その代わりに有機養分の分配を受けて生長繁殖を続けているからなのです。

これらの菌根性きのこが子実体（きのこ）を発生させるのは、樹々がまだ光合成を盛んに行っている夏から秋で、林内の小径を歩くと多くの菌根性きのこを見る事ができます。

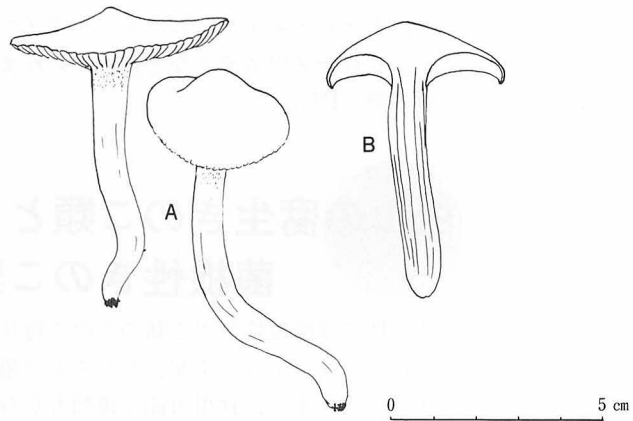
ブナ林には、近縁のブナ科樹林に発生する菌根性きのこの大半が発生し、その他ブナ林内に生育するカバノキ科の樹木と共生するきのこや、マツ類と共生するきのこも認められ、ブナ林に限定されるきのこは少ないのです。

きのこ相から見たブナ林は、温帯性きのここと寒帯性きのこが交錯して分布し、極めて興味深い森なのです。ブナ林のきのこ相や樹木との関係が近年、次第に明らかにされ、ブナ林の新しい側面がクローズアップされる日がくると思われます。

<石川植物の会>



白山のブナ林



A. 子実体  
B. 子実体縦断面

ブナヌメリガサ (ヌメリガサ科)  
*Hygrophorus leucophaeus* (Scop.) Fr.  
(秋 ブナ林下に群生 分布: 北半球温帯)



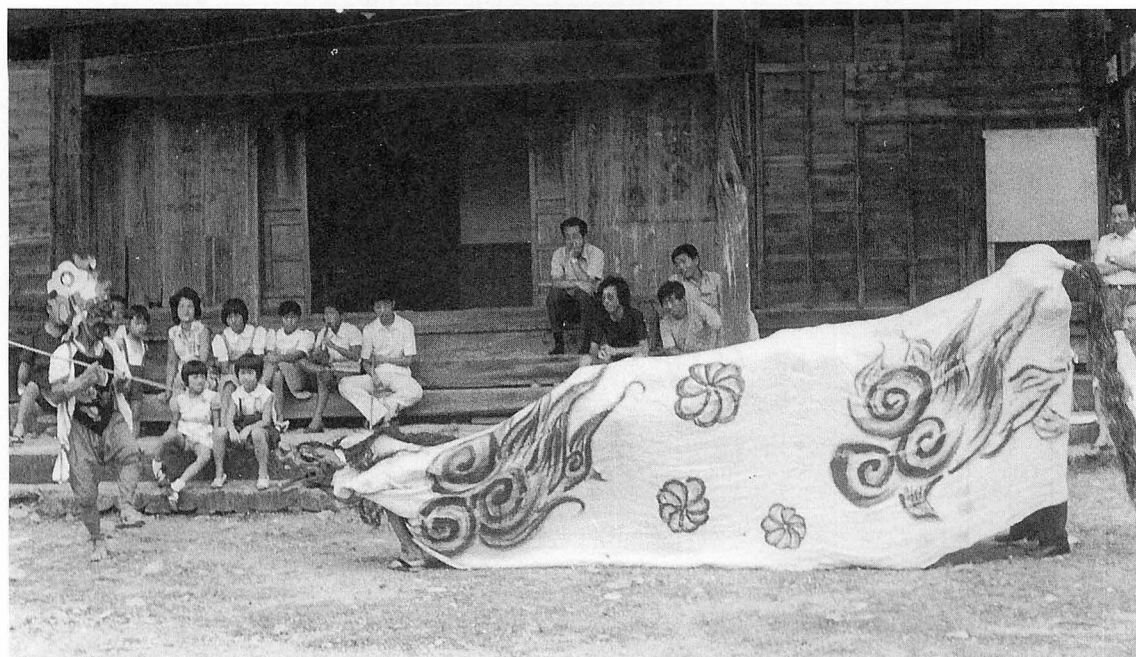
## 白山のブナ林の主なきのこ

		腐 生 菌 類		菌 根 菌 類
		木 材 腐 朽 菌	落 葉 腐 朽 菌	
生き方		立木、倒木、切り株の傷から、材を分解吸収して生長。	落枝葉や地中の腐植物、動物遺体や排泄物を分解吸収。	特定樹種の生木の根の先端に菌糸をからませた菌根で、地中の無機栄養と樹の有機栄養を互に変換。
きのこの発生場所		立木や倒木の幹を分解する種は材上に、根際を腐朽する種は根元や株の周辺。	堆積落枝葉の多い地上、地中の腐植物や動物遺体、排泄物の埋まっている地上。	菌根を作っている樹木の根の先端附近地上。
白山ブナ林に産する主なきのこの食用不適種	食用可能種	ヒラタケ、ウスヒラタケ、◎ブナシメジ、ナラタケ、◎ヌメリツバタケモドキ、ムキタケ、エノキタケ、ウラベニガサ、ヌメリスギタケ、ヌメリスギタケモドキ、ナメコ、クリタケ、タマウラベニタケ、ヤマブシタケ、◎ブナハリタケ、◎トシビマイタケ、◎マイタケ、ヤニタケ	アカヌマベニタケ、トガリベニヤマタケ、ハダイロガサ、オトメノカサ、オオキツネタケ、カヤタケ、カレバタケ、アマタケ、モリノカレバタケ、ツエタケ、カラカサタケ、ツチナメコ、チャナメツムタケ、キナメツムタケ、シロナメツムタケ	◎アケボノサクラシメジ、サクラシメジ、◎ブナヌメリガサ、コクリノカサ、キシメジ、シモフリシメジ、タマゴタケ、ショウゲンジ、ヌメリササタケ、アブラシメジ、ウラベニホテイシメジ、▼ムラサキヤマドリタケ、ウツロイグチ、アカヤマドリ、チリメンチチタケ、◎ヒロロードチチタケ、コウタケ
備考		◎ツキヨタケ、●ニガクリタケ、◎オオワライタケ(以上有毒)ハチノスタケ、ヒラフスベシロカイメンタケ、ホウロクタケ、◎ツリガネタケ、◎エビタケ、コフキササルノコシカケ、ミヤマウラギンタケ、◎ムカシオオミダレタケ その他多数の硬質菌類	サクラタケ、ヒロヒダタケ、スギタケ、ツチスギタケ(以上有毒)ワサビカレバタケ、◎ウスキブナノミタケ、モエギタケ、アシナガヌメリ、◎アラゲホコリタケモドキ、コツブホコリタケ、タヌキノチャブクロ、ホコリタケ	●ドクツルタケ、●フクロツルタケ、テングタケ、タマゴテングタケモドキ、クサウラベニタケ、コガネホウキタケ(以上有毒)コシロオニタケ、コガネテングタケ、ヒメベニテングタケ、ミヤマベニイグチ、シュイロハツ
		◎ブナの材または生木と深い関係のある種 ●猛毒種 ◎根際腐朽菌	稀産種	▼石川県では白山ブナ林のみ △南限種

# 白山麓の獅子舞

——民俗芸能の伝播——

小倉 学



尾口村鴉ヶ谷の最後の獅子舞（昭49. 8. 16）

## 加賀獅子と能登獅子

白山麓の民俗芸能のうち注目されるのが獅子舞である。個人芸とは違い、地域をあげて出演するので民俗芸能とよぶのにもっともふさわしい。石川県が昭和56年から5年間実施した獅子舞緊急調査（石川県の獅子舞、1986）によれば、白峰村をのぞく40市町村すべてに獅子舞が分布し、加賀地区が438ヵ所、能登地区が304ヵ所、合計して742ヵ所にも達することが知られた。

白山麓では、白峰村に獅子舞がないのは不思議だが、尾口村をはじめ村々には加賀獅子のほかにも能登獅子も見られ、民俗芸能の伝播という問題を考えようとする場合、きわめて重要な事例となるであろう。

加賀獅子は規模が雄大である。大きな獅子頭、カヤとよばれる巨大な胴体、その内部に笛・太鼓・三味線などの囃子方が入って悠然とねりある。この獅子に戦いをいどむのが棒振りである。頭上にシャンガン（毛頭）をかぶり、棒・太刀・薙刀などを執って1人あるいは2人、ときには数人が獅子に対し、最後はヨイヤーとさけんで獅子を退治する「殺し獅子」で、もっとも代表的なのが金沢獅子なのである。

能登獅子は小型である。獅子に対するものを笑狗と称して鼻窩の仮面をかぶり、細い竹や棒を持ち、笛・鉦や太鼓の囃子にあわせて獅子と一緒に踊る「舞い獅子」で、能登地区に広く分布している。

## 鶺鴒ヶ谷の獅子舞は能登獅子

尾口村の鶺鴒ヶ谷は手取川ダムによる水没を免れたがムラはなくなった。9月の盆祭りに出た獅子舞は珍しくも能登獅子だった。小型の獅子頭と細長いカヤには若衆が4人入る。獅子の相手になって舞うのが天狗で鳥甲ふうの鳥帽子に天狗面をかぶり、胸当て・股引姿で1メートルばかりの細い棒を持ち、囃子にあわせて獅子とともに踊り舞う。演目にサッサイ・キョウブリ・キリマジリの3曲があるのも典型的な能登獅子だった。

能登獅子がどうして白山麓にまで伝わったのか。古老に聞くと、明治10年代(1882年頃)、鶺鴒ヶ谷にやってきた能登羽咋郡徳田村(現、志賀町の徳田)のコバヘギ職人が伝授したのだという。コバは杉材・栗材を割ってはいだ屋根ふきの薄板である。明治・大正時代は能登のコバヘギ職人が季節的にやってきてコバを製作した。その職人が鶺鴒ヶ谷の若衆に能登



尾口村鶺鴒ヶ谷の獅子頭(昭49. 8. 16)

獅子を教え、獅子頭や天狗面も自分で彫って与えたのだという。

私は昭和50年7月に志賀町の徳田で民俗調査をしたとき、コバヘギ職人だった花野新兵衛氏(明治28年生)に鶺鴒ヶ谷の話をつしめた。驚いたことに、明治前期に鶺鴒ヶ谷へ出かけたのが徳田の大門忠左衛門さん(大正末期に70余歳で死去)という獅子舞のベテランで、クリモノ(彫刻)が得意だったという話を聞き、鶺鴒ヶ谷と徳田との伝承がピッタリと一致するのにびっくりしたことがある。

鶺鴒ヶ谷は過疎のため久しく獅子舞を休んでいた。たまたま昭和49年8月16日のお盆に訪れると、ムラを出た人たちが墓参りに大勢きていた。突然だったが獅子舞の実演を懇請したところ、心よく承諾されて鶺鴒ヶ谷道場(小松市の勸歸寺の支坊)の前で演舞してくださった。これが鶺鴒ヶ谷における獅子舞の最後となったのは、それから23日後の9月8日に鶺鴒ヶ谷の閉村式をしたからである。



能登(七尾市)の獅子舞(昭62. 10)



尾口村尾添の獅子舞（平3. 9. 15 尾口村教育委員会提供）

## 尾添の獅子舞は加賀獅子

尾口村の獅子舞は尾添にもある。巨大な加賀獅子ですばらしい。勸進元は青年団だったが、近年は民謡保存会が運営し、笛・太鼓の囃子方はハラワタ連中とよばれて婦人会員がカヤの外でつとめている。

棒ふりは舞い子とよばれて若衆の所役である。演目は一人棒（棒あるいは薙刀を執る）と二人棒（棒と棒あるいは棒と薙刀）があり、眠れる獅子を起こして戦い、最後はヨイヤーと叫んでとどめを刺すと、獅子はガラリと頭をさげるといった典型的な加賀の金沢獅子である。

獅子舞は9月の盆祭りに出すのであるが毎年ではなく、数年に1度である。近年は演技の継承のため代りに、子ども獅子を毎年出しているという。また盆祭りのほか、地域の慶祝行事にも出演する慣行があり、私が初めて見たのは昭和51年7月、国民宿舎白山一里野荘落成式のときだった。

尾添の獅子舞の由来は明らかでない。古老の話によれば、明治の初期に尾添にやってきたコバヘギが桐材で獅子頭をこしらえて獅子舞を教え、胴体のカヤも当初は四つ幅の風呂敷をつぎあわせて用いたという意外な伝承を聞いたのである。これが事実だとするならば、尾添へは能登の羽咋郡のコバヘギがきたことになるから、その獅子舞も鶺鴒谷と同じく能登獅子だったかもしれない。



ところが尾添は大正9年(1920)の大火で獅子頭をはじめ用具類をすべて焼失してしまつた。たまたま大火後、尾添の復興作業にきていた石川郡蔵山村槻橋(現、鶴来町月橋)の大工が青年団に獅子舞を教え、青年団も獅子頭を金沢の辻川刀川にあつらえ、用具一式を整えて新しく獅子舞を始めたのが大正13年だったという。そこで私は昭和52年6月に鶴来町の月橋を訪ね、獅子舞に詳しい辻他計雄氏(大正4年生)をはじめ古老にたしかめると、尾添の所伝と符節を合わすように一致するのであった。その大工は大滝初次氏(昭和30年没、69歳)という獅子舞の棒ふりの名手で、尾添には数年間滞在して大工仕事に従事していたといふ。

鶴来町の月橋は獅子舞に熱心なところで、棒ふりの系統は加賀獅子すなわち金沢獅子である。明治中期、同地の青年が金沢南端の鶴来街道に沿う地黄煎町(現、泉が丘2丁目)にあった町田半兵衛道場に入門し、半兵衛流の獅子舞の棒ふりを学んで練磨したのである。それが大滝初次氏によって尾添に伝えられたというのである。



尾口村尾添の獅子舞(昭51. 7. 26)

## 吉野谷村の獅子舞

吉野谷村の獅子舞は中宮・佐良・上吉野(現在は休止)・瀬波で見られる。いずれも金沢獅子すなわち加賀獅子系である。とくに中宮のは対岸の尾添と同じで、現行の棒ふりは大正3年(1914)頃、仕事で中宮にきていた月橋の大工の辻弥三氏(昭和35年没、73歳)と前記の大滝初次氏の指導をうけたものだといふ。したがって金沢の半兵衛流ということになる。

佐良のは、明治中期に佐良の桐材を仕入れていた鶴来の東町の業者が伝授したものだといふ。鶴来は今も獅子舞の盛んなところで、明治中期には東町をはじめ清沢町・知守町の青年がこぞって金沢の町田半兵衛道場に学んで半兵衛流の棒ふりを習得している。それが鶴来の東町を通して佐良に伝えられたのである。上吉野・瀬波も同じように鶴来から伝わったのである。



吉野谷村佐良の獅子舞(昭52. 9. 15)

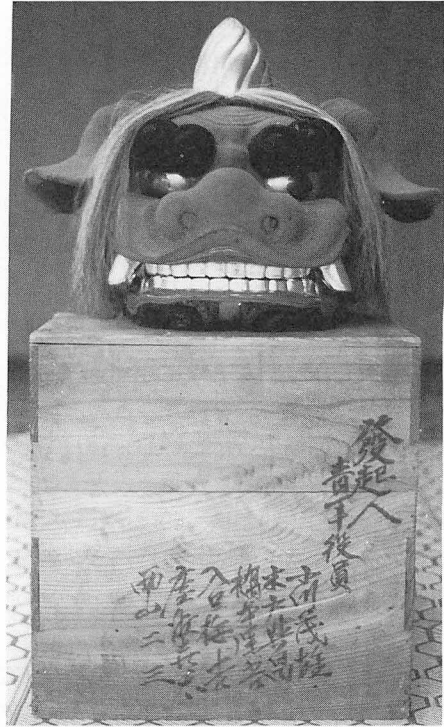
## 民俗芸能の伝播

民俗芸能は伝播するものである。長期の出稼ぎ職人によって加賀獅子や能登獅子が伝えられた上記の事例によっても理解できよう。また多くが鶴来町を中心として伝播している点が見のがせないところである。

鶴来町は白山に発する手取川扇状地の要所に位置するので、白山麓の村々と加賀平野とを結ぶポイントとなり、物資の交流をはじめとする生活文化、それは祭礼や芸能の面にも大きな影響を与えてきた。白山麓の秋祭りに見られる巨大な造り物も鶴来にならったのである。ヒョットコ面をかぶり、ボロを着て熊手をもち石油かんを引きずって歩くニワカも鶴来のバク面をまねたものである。

そして加賀獅子を代表する金沢獅子の半兵衛流の棒ふりが、鶴来を経由して白山麓に伝えられたのである。民俗芸能の伝播史を眼前に見る思いがするといっても過言ではあるまい。

<国立石川高専名誉教授>



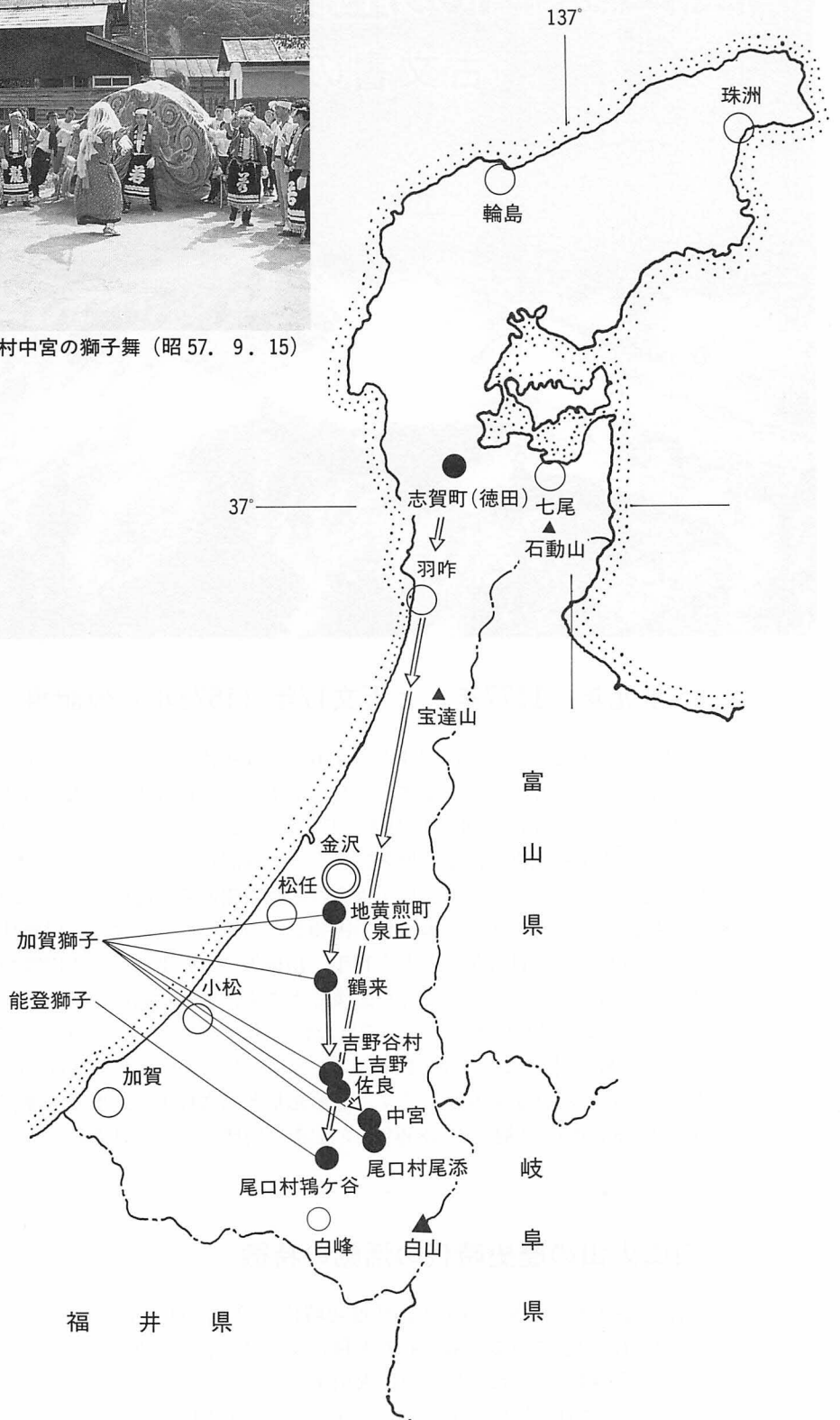
吉野谷村中宮の獅子頭（昭52. 9. 15）



鶴来の獅子舞（昭45. 10. 4）



吉野谷村中宮の獅子舞 (昭 57. 9. 15)



加賀獅子と能登獅子の伝播略図

# 白山火山の歴史時代の活動

## 古文書の記録をもとに (5)

東野外志男



1984. 2. 20

### 治承元年 (1177年) と天文17年 (1578年) の記事

前回まで白山火山の活動に関連ある記事をほぼ年代順に紹介してきましたが、実は、まだ取り上げてないものがあります。それは治承元年 (1177年) と天文17年 (1578年) の記事です。内容は、「治承元年の四月十二日に、白山が自焼」と「天文十七年、白山が焼く」というものです。私自身はまだ原著にあたって確認していませんが、『本朝年代記』という書物に記されているそうです。白山火山の活動に関連ある記録には、実地見聞がありきわめて信頼性の高いものから、単に他の書物からの孫引だけのような信頼性の低いものがあります。治承元年 (1177年) と天文17年 (1578年) の記事は、その内容や書名から他からの孫引きである可能性が高いことが想像できます。玉井敬泉氏は、そのような記事に対しては、傍証がない限り信すべきものではないと述べています。単に孫引きだけのものには、この連載の第2回 (「はくさん」18巻1号) で紹介した延応元年 (1239年) の記事のように、まちがっている場合があるからです。治承元年と天文17年の記事は、慶雲三年 (706年)・仁寿三年 (853年)・貞観元年 (859年) の記事と同様に、その真偽は今後の研究にまかたいと思います。

### 白山火山の歴史時代の活動の特徴

これまで紹介してきた白山火山の歴史時代の活動記録をまとめると図のようになります。最も右に記してある「噴気孔の出現」は昭和10年に千仞滝に出現した噴気孔のことをさします。破線で示したのは、白山火山が活動したと確定するには、まだ疑問が残るといふものです。これら疑問のあるものを除くと、白山火山が活動したことが明らかなのは、



長久10年（1042年）と、あとは天文十六年（1547年）から万治二年（1659年）までのほぼ100年の間に集中しています。

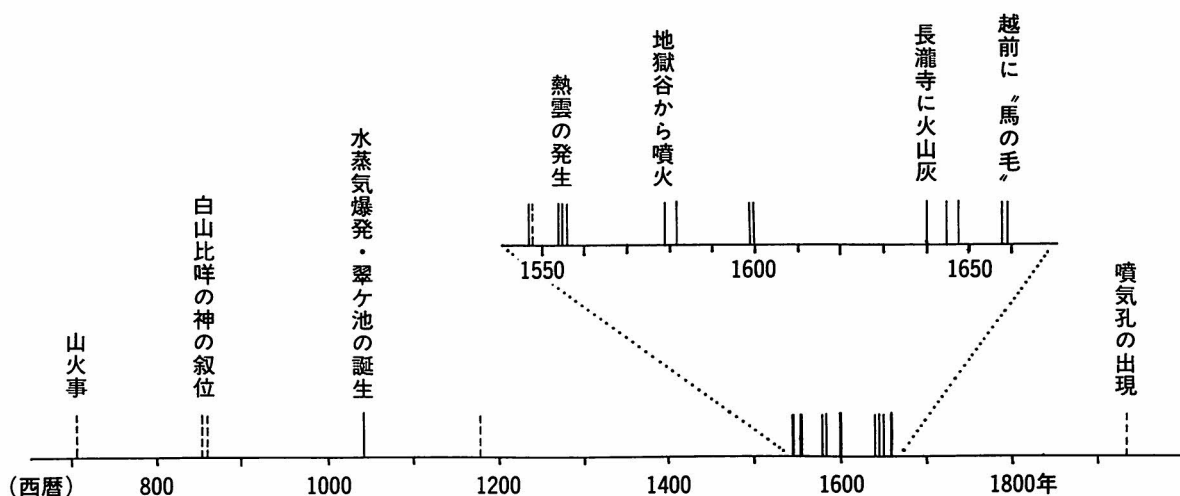
火山や地震の将来の活動を考える際、よく問題にされるものに「活動の周期性、があります。自然現象にリズムや規則性があるので、周期性を求めるのも自然でしょう。白山火山の歴史時代の活動に関しては、古文書の記録だけから周期性をよみとるのは、まだむずかしいように思われます。信頼できる古文書の記録は11世紀以降で、現在まで、まだ1000年に満たない期間です。周期性をよみとるには、まだ期間が短すぎるといわざるをえません。ただ、この図からは、白山火山の歴史時代の活動が、等間隔で規則的に起きているのではなく、百年から数百年オーダで活動期と休止期に分けられるとってよいでしょう。つまり、17世紀中頃から今日までと11世紀中頃（もしくは12世紀後半）から16世紀の中頃までが休止期で、16世紀中頃から17世紀中頃までが活動期となります。将来白山火山が活動を再開した場合、古文書の記録からは、16世紀中頃から17世紀中頃のように、断続的に100年間ぐらい活動が続くと予想することもできます。

## おわりに

これまで五回にわたって、古文書に記されている白山火山の活動記録を紹介してきました。火山の噴火のことが古文書に記されているということを知っていても、その生の内容を知らないことが多いようです。今回、長くなりましたが、現代訳をして古文書の内容をそのままの形で紹介したのは、そのためです。

古文書の記事を現代語訳するに際して、石川県立図書館加能史料編纂室の東四柳史明氏にご教示いただきました。お礼申し上げます。また、これまで出版された書物も参考にさせていただきますましたが、現代語訳に誤りがあるとするとすべて筆者の責任です。

（白山自然保護センター）



古記録をもとにした白山火山の歴史時代の活動

# 山でクマに出会った話

上馬康生

ブナが大豊作であった昨年と違って、今年は山の木の実が全般的に不作で、特にブナの実は、どこの山を歩いても見つけることはできませんでした。そのためでしょうか例年になく早く、10月の終わりにもう野生のサルの群が人里に現れて、畑の野菜に手を出し問題になりました。サルだけでなく、聞くところでは福井県では奥越地方でクマ（ツキノワグマ）が何度か出沒し騒ぎになったようです。県内でも吉野谷村上吉野で、夜に民家のカキノキに上がっているのが見つかっています。保護獣ではないクマは、人目につくと騒がれたうえ撃ち殺されることが多いので、普通は人里にはあまり近づかないのですが、食べ物の十分でない年はそれもいっておられないのでしょうか。

普段はめったにお目にかかれないうまに、実は私も今年の秋ばったり会うことができました。10月の初めに朝早く中宮温泉を出発して、白山への登山道を登って行きました。約1時間ほど歩いたとき、すぐ近くで「ボキッ」と木の折れる音がしたのです。山の中で、枝



ブナの幹のクマの爪あと

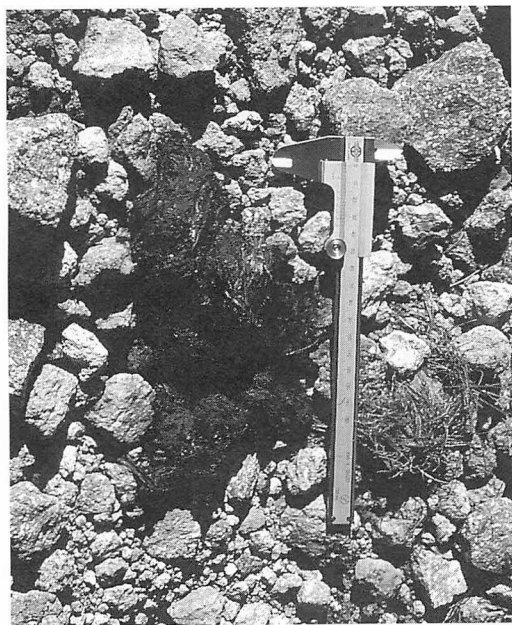
（秋の実だけでなく花も好物で4～5月頃の葉を広げる前の木に上って食べる。 1981. 9.22 チブリ尾根）



クリの樹上に残っていたクマ棚

（落葉した冬の林の中でクマ棚となった枝の枯葉はよく目立ち、春まで残っていることがある。 1984. 4.14 高倉山）

を折ってよく聞こえるほどの大きな音を出すのはサルかクマくらいで、そうでなければヒトでしょう。この付近はサルの群のいるところなので、きっとサルだろうと思って音のした方向を見上げると、なんと黒っぼいかたまり。相手は全くこちらに気づいていない様子で、ガサガサと音を立てていたのです。距離はほんの10mあまり、ミズナラの大木の樹上でした。静かにザックを降ろし、カメラを取り出しシャッターを一度きると、木の上でびっくりしたように頭を振り振り下を見回し、私のいることに気づきました。それまで必死になってミズナラのドングリを食べていたのです。この季節は厳しい冬に備えて、サルもクマも餌を食べる



登山道に落ちていたクマの糞  
 (夏には高山植物の若葉やイチゴ類などを求め  
 て白山のお花畑まで上ってくる。  
 1986. 7.30 大汝峰)

のにいっしょうけんめいです。ましてや今年  
 は木の実もあまり見つからなかったのしょう。  
 いつもならヒトの気配をクマの方で先に  
 気づくのですが、あまり夢中だったので  
 わからなかったのです。ちょっと不安はあり  
 ましたが、そのままじっと動かず見ていると、  
 クマはゆっくり枝を下り、幹までくると後ずさ  
 りになりゆっくりと下りてきました。そして  
 そのまま、まったく音も立てずに姿を消して  
 しまいました。その木の根元はブッシュに隠  
 れていたので行方は不明でした。

よくみるとそのミズナラには、クマが実を食  
 べるために折り取って積み上げた枝(クマ棚と  
 呼びます)が5か所に散らばっていました。夜  
 中から、あるいは前日から食べていたことが分  
 かりました。その日はそれから山へ登り翌日ま  
 た同じ道を下ってきた時、その木を見上げると、  
 なんとクマ棚が倍に増えているではありませんか。  
 クマは私をやり過ごしてから、また木に  
 上ってドングリを食べたのです。

クマに限らず、自然の中での野生動物との出会いはこのようなものなのです。豊かな自然の中には、そこら中にいるはずですが、普通は動物の方が先にヒトの気配を感じて身を隠してしまうので、近くにいっても気が付かないのがほとんどなのです。特にけものは、耳や鼻による感覚がヒトの何倍も優れているので、何人かで話をしながら歩いていたのではとても出会えません。登山道はヒトだけでなく、けものにとっても歩きやすく、通り道に使っているの、道のないところより出会う確率は高いはず。参考までに登山道周辺で見つけたクマに関する痕跡をいくつか写真で紹介しました。

私は一人で山を歩くことが多いので、カモシカやリス、テンなどにすぐ近くで出会うことがあります。山道を静かに歩き、見つけたときにはじっとして、できる限り身動きをしないで見守っていると、相手もいろいろな仕草で応えてくれます。クマに(他のけものにも)会いたくない人は何人かで一緒に歩いてください。大きな音を無理に出す必要はありません。遠くから人の気配をいち早く感じ取って、隠れてしまうはずですから。それでももし出会えば、幸せと思ってください。会いたくてもめったなことで会えるものではないのですから。(白山自然保護センター)



クマによる道標の引っかき傷  
 (ベンキのにおいが好きなようで、新しい道標  
 はよく引っかかれたり、かじられたりしてい  
 る。  
 1986. 6.28 チブリ尾根)

## たより

- きのかやかびなど森の中の微生物の働きについては、地味で、目立たない生物のせいでしょうか、その大切な役割も見逃されがちだと思います。きのこの役割の大切さだけでなく、白山に分布する「きのこ」も、池田氏が紹介された「ムラサキヤマダリタケ」のように、白山山系のブナ帯や、亜高山、高山帯にのみ生育するきのこが今後発見され、「きのこ相」から見た白山の特性が明らかにされる日も近いと思われます。
- 白山麓における民俗(芸能)文化の伝播は手取川の本流、支流域や九頭竜川の支流(滝波川や打波川など)の下流域から上流域へ、あるいは上流域から下流域(里から山麓へ、山麓から里)へ伝播してきたと考えられます。一方、宮本常一が指摘した「山民往來の道」(1964)のように、里の文化や山麓文化を考える時、山から山にのみ伝播している別の伝播様式があったことと、これに影響されている里や山麓文化も考える必要があると思います。小倉氏の報告からは、日本文化の伝播の様々な形態を考えるヒントが示唆されているように思われます。
- 12月18日、環境庁でツキノワグマの保護管理検討会が開催され、野崎研究員が委員として出席しました。

日本の大型鳥獣類の保護の実情については、どの種類をとってみても、科学的な保護管理とは程遠く、久しく諸外国の批判をあびているものです。

この検討会によって、クマの適正な管理システムが樹立され、同時に他の鳥獣類についても同様の対処が望まれます。

〈林 哲〉

## 目 次

ハクサンシャクナゲ	米山 競一	1
白山のブナ林のきのこ	池田 良幸	2
白山麓の獅子舞—民俗芸能の伝播—	小倉 学	6
白山火山の歴史時代の活動—古文書の記録をもとに(5)—		
	東野外志男	12
山でクマに出会った話	上馬 康生	14
たより		16

はくさん 第19巻 第3号 (通巻81号)

発行日 平成3年12月20日(年4回発行)  
編集発行 石川県白山自然保護センター  
石川県石川郡吉野谷村木滑  
〒920-23 Tel 07619-5-5321  
印刷所 株式会社 橋本 確文堂